

1 脳の機能を麻痺させるアルコール

飲酒運転の危険性

アルコールには麻酔作用

情報処理能力

注意力

判断力

が低下

気が大きくなり速度超過など危険な運転をする
車間距離の判断を誤る
危険を察知しブレーキを踏むまでの時間が長くなる
など

結果

交通事故に
結びつく可能性高い

「何人も、酒気を帯びて車両等を運転してはならない。」(道路交通法第65条第1項)

飲酒運転は、ビールや日本酒などの酒類やアルコールを含む飲食物を摂取し、アルコール分を体内に保有した状態で運転する行為です。

アルコールには麻痺作用があり、脳の働きを麻痺（まひ）させます。一般に「酔う」とは、血中のアルコール濃度が高くなることにより、大脳皮質（大脳の理性や判断を司る部分）の活動をコントロールしている大脳下部の「網様体」が麻痺した状態を言います。お酒に酔うと、顔が赤くなる、多弁になる、視力が低下するなどの変化が現れ始め、さらに知覚や運転能力を司る部分が抑制されることにより、同じ話を繰り返したり、足元がふらついたりします。

このように、飲酒時には、安全な運転に必要な情報処理能力、注意力、判断力などが低下している状態になります。具体的には、気が大きくなり速度超過などの危険な運転をする、車間距離の判断を誤る、危険を察知しブレーキペダルを踏むまでの時間が長くなるなど、飲酒運転は、事故に結びつく可能性が高いのです。

また、低濃度のアルコールであっても運転操作等に一定の影響が見られること、いわゆる酒の強い人も弱い人と同様にアルコールの影響があることが各種調査研究により明らかとなっています。

[「低濃度のアルコールが運転操作等に与える影響に関する調査研究」](#)

科学警察研究所交通安全研究室

[「アルコールが運転に与える影響の調査研究」](#)

財団法人 交通事故総合分析センター

飲酒運転の死亡事故率は 飲酒なしの9.4倍

平成19年中

飲酒ありの死亡事故率は、5.69%

飲酒なしの死亡事故率は、0.60%

飲酒運転の死亡事故率 ~ 飲酒なしの9.4倍

死亡事故率 = 死亡事故件数 ÷ 交通事故件数 × 100

酒酔い運転の死亡事故率 ~ 飲酒なしの34.4倍

飲酒運転 ~ 重大事故につながる 割合が高い

飲酒運転の死亡事故率は、「3 飲酒運転による交通事故の発生状況」を参照。